

インテレクチュアル・ヒストリーに ついての一考察

—マール・カーティの著作を中心として—

明 石 紀 雄

は し が き

アメリカ史学界の一つの新しい傾向としてインテレクチュアル・ヒストリーが語られるようになってからすでに久しい。史学研究におけるこの新しい接近方法は19世紀後半からこのかた、とくに20世紀になってから発達したものであって、最近ではアメリカ史学界の一つの主流をなすところまで発展してきたのである。

インテレクチュアル・ヒストリーとは何であるかを考えるのがこの小論の目的であるが、その前に現在のアメリカ史研究における主なる傾向を二・三振り返ってみたい。まず第一に、思想 (ideas) というものの存在が認識され、その歴史発展における役割・機能といったものが追究せられていることである。例えば特定の思想がそれ自体独立したものとして取り扱われる場

合もあるが、社会環境との関連において、あるいは特定の出来事 (events) との相関関係において思想が研究課題とされていることも多くある。第二には、歴史学の対象として一国の政治的経済的發展のみならず、その教育、文学、芸術、哲学思想、自然科学史も公けのトピックとして含まれるようになったことである。第三には、このように歴史学の取り扱う対象が広くなるに伴い、それに適した接近方法が発見開拓されてきたことがあげられよう。すなわち総合的あるいはインター・ディシプリナリーなアプローチというのがそれである。こういった傾向が取りも直さずインテレクチュアル・ヒストリーの貢献であり、いまやアメリカ史学界において一つの学派を形成しているとも言われる

なお Introduction to: Brinton, Clarence Crane, *Ideas and Men or the Story of Western Thought*, 2nd ed., 1963: Hutchinson, W.I., ed., *The Marcus W. Jernegan Essays in American Historiography*, 1937; *Theory and Practice in Historical Study*. Published by Social Science Research Council, 1946; *Studies in Intellectual History*. Published by The Johns Hopkins University Press, 1953. も参考になる。また Lovejoy, Arthur, *The Great Chain of Being*, 1936, Harper Torchbook edition 1960 および *Essays in the History of Ideas*, 1948, Capricorn Books edition 1960 はアメリカン・インテレクチュアル・ヒストリーを論ずる際に一読を要するものであろう。邦文では中屋健一『インテレクチュアル・ヒストリーについて』(『東大教養学部紀要1—歴史と文化』昭和27.4), 今津晃『インテレクチュアル・ヒストリー』(『講座哲学大系第4巻—歴史理論と歴史哲学』人文書院 昭和38) などがある。著者がみたかぎり中屋教授の論文はインテレクチュアル・ヒストリーをわが国に紹介した最初のものである。

(1) インテレクチュアル・ヒストリーについて書かれた論文には次のようなものがある。

Baumer, Franklin L., "Intellectual History and Its Problems", *Journal of Modern History*, XXI (Sept. 1949), 191-203; Higham, John, "The Rise of American Intellectual History", *American Historical Review*, LVI (April 1951), 453-71; "Intellectual History and Its Neighbors", *Journal of the History of Ideas*, XV (June 1954), 339-47; "American Intellectual History: A Critical Appraisal", *American Quarterly*, XIII (Summer 1961), 219-33; Welter, Rusch, "The History of Ideas in America: An Essay in Redefinition", *The Journal of American History* (March 1965), 599-614; Skotheim, Robert Allen, "The Writing of American Histories of Ideas", *Journal of the History of Ideas*, XXV (April-June 1954), 257-78

ゆえんである。

過去50年の間に発表されたアメリカ史研究の中にはインテレクチュアル・ヒストリーに属すものは少なくない。例えばマール・カーティの「アメリカ社会文化史」があげられよう⁽²⁾。カーティはこの著作において、科学・芸術を含むアメリカ国民の知的生活 (intellectual life) を広い視野から取り扱っているが、この著作はある意味においては、インテレクチュアル・ヒストリーへの入門書・概説書でもある。それはカーティがこの書物の巻頭において、自分の追求しているものは「アメリカ思想の社会史」であるといっているからであり、「思想の社会史」追究という定義付けによりアメリカ史学界におけるインテレクチュアル・ヒストリーの地位が有力なものになったからである。この著作ならびにその他のインテレクチュアル・ヒストリーの専門研究については後に詳しく検討することにする⁽³⁾。

第一章 インテレクチュアル・ヒストリー ——その定義

前述のごとく、インテレクチュアル・ヒストリーはアメリカ独自の歴史解釈として発達し、アメリカ史学研究に重要な貢献をしてきたのであるが、その目的・領域・方法についていまだに一致した意見が見られないこと、またその貢献について異なった評価がなされていることを考えるとき、インテレクチュアル・ヒストリーは果して本当に歴史学において確固たる地位を占めるにいたったのかという疑問が生じる⁽⁴⁾。言いか

(2) Curti, Merle, *The Growth of American Thought*, 1943. 邦訳には龍口直太郎・鶴見和子・鶴飼信成共訳「アメリカ社会文化史」三巻 (法政大学出版局 昭和29) がある。

(3) ここでとくにカーティをとりあげているのはむしろ偶然的なものであって、かれのほかには代表的なインテレクチュアル・ヒストリアンがいないというのではない。短期間ではあったがかれに直接指導を受けたものとして、かれの学風の印象などを整理しておきたいという筆者の個人的な理由によるのである。

(4) 例えばハイアムは1954年の論文においては「幾種類ものインテレクチュアル・ヒストリーが可能であり、それらは共存するであろう」といいながらも、1961年の論文では「思想の内奥 (内性理解) をさぐるのがインテレクチュアル・ヒストリーの唯一の (仕事) である」といっているのである。

えれば、インテレクチュアル・ヒストリーはいまや独立した一つのディシプリンとして規定してもよいかどうかということである。この比較的若い歴史分野について反省と考察がうながされているのはそのためであり、小論においてインテレクチュアル・ヒストリーの性格が再評価されているのもそのためである。しかしここでは一つの学問体系としてのインテレクチュアル・ヒストリーについて結論を出そうというのではなく、むしろこれまでにそれが辿った足跡を再検討し、その将来性について考えることに重点が置かれているのである。

インテレクチュアル・ヒストリーにたいする疑問や批判の多くは、それがどのような歴史学研究の方法であるかについて明解な答えが与えられないこと、その対象とするものならびにその方法において多様性が認められるからである。

インテレクチュアル・ヒストリーを辞義通りに解釈して、人間の—あるいは人間の集団としての社会の—知的生活の歴史を研究対象とするものであると定義されようが、あまりにもアカデミックな定義である。少し見方を変えて、インテレクチュアル・ヒストリーは学説史といったような、われわれがふつういう意味での思想の歴史を扱うといえようが、少なくともアメリカ史研究においてはこの限りではない⁽⁵⁾。インテレクチュアル・ヒストリーを狭義の思想史と同じに考えてはならない。すなわち狭義の思想史が学術論文、評論、教義、小説、詩などに表現された、体系的に組織

(5) わが国で考えられている思想史とインテレクチュアル・ヒストリーは多くの類似点を持っており、インテレクチュアル・ヒストリーとは思想史のことであるといった解釈も可能であるが、厳密には両者は同一のものではないと思う。インテレクチュアル・ヒストリーはアメリカ独自の歴史解釈であり、アメリカ史研究において発達したものだからである。なお思想史研究についての論文には、生松敬三『戦後における思想史方法論の検討』(『思想』昭和38.5) 城塚登『思想史研究の動向 (その二)』(『思想』昭和32.11) などがあり、武田清子編「思想史の方法と対象」(創文社 昭和38) に収められている丸山眞男『思想史の考え方について—類型・範囲・対象』は示唆に富むものである。

づけられた理論を対象としているのにたいし、インテレクチュアル・ヒストリーは、人間の抱くさまざまな価値観、社会の慣習一般、莫然としてはいるが現に存

在するイメージや態度といったものをも思想あるいは観念形態として対象にするのである。従ってインテレクチュアル・ヒストリーにおいては、いわゆる思想というものは雑誌などの定期刊行物、各種団体の記録、伝説、民謡、諺にも求められるのである。

また、インテレクチュアル・ヒストリーにおいての思想のにない手というのは狭義の思想のにない手とは異なる。インテレクチュアル・ヒストリーにおいては「深遠な、独創的な思想」を求める知識階級のみではなく、「創造的な作家、芸術家、評論家、見識ある諸者層」や「専門分野で真理探究・学術全般の進歩に献身するひとびと」も含まれるのである⁶⁾。さらには、ごくふつうの市民一個人としてあるいはグループとして一もかれの有する思想・イメージのゆえに、インテレクチュアル・ヒストリーの研究対象となるのである。この意味において、深遠な思想家の考えはおのおのの専門領域—例えば哲学史といった—に属し、一般の市民の思想はインテレクチュアル・ヒストリーに属するという差別はあるべきではないと思う。

抽象度の高い思想—例えば教義といったもの—がインテレクチュアル・ヒストリーの対象となり、特定の観念—例えばアメリカにおける進歩の観念—や、ふつうという意味での時代の風潮(精神史)もインテレクチュアル・ヒストリーの中心課題になるのは容易に理解できる。しかしさほど容易でないのはまず第一に、こういった思想を社会環境・基盤と関係づけて考えることである。第二には、少数の知識人の思想と多数の市民の行動に関連を見いだすことである。第三には、知識人も一般市民も社会思想という面では同等にとらえることである。最後の点をカーティの**ことば**を借りていいかえれば、ひとはみななんらかのかたちで「社会に対する態度」を有するのであり、この次元において知識人も一般市民も同様にインテレクチュアル・ヒ

ストリーの対象となりうるのである。カーティはこう書いている⁷⁾。

人の社会思想はかれ(あるいはかの女)が示すところの、他人との日常の付き合いにあらわれる。かれの家族や、かれの属する社会階級、祖国、そして人類全般に対する知的・感情的反応がかれの社会思想の重要なものである。下層のひとびと—たとえば黒人、インディアン、移民……など—にたいする態度や、ナショナリズム、インターナショナリズム…戦争や平和といった問題にたいする考え方にもかれの社会思想があらわれる。

このようにインテレクチュアル・ヒストリーとは、主に思想や観念形態を扱うものであるが、狭義の思想史と異なる点は思想の意味が広く解釈され、社会環境—あるいは社会的基盤—との関係において思想をとらえようとする努力がなされるかたわら、思想のにない手についても拡大された解釈がなされていることであろう。またインテレクチュアル・ヒストリーにおいては学校や教会などの思想伝達のための機関、あるいは公開講演などの文化伝播のための諸制度や設備も研究対象になりうるのである。

インテレクチュアル・ヒストリーについて簡単な定義をくたすのは容易ではないが、しいていえば思想の社会史と考えられよう。思想史に重点を置いた社会史と把握するのが適当と考えられるのである。しかしこの場合でも思想という概念は広い範囲を含むこと、そして思想とそれを生んだ社会環境の相関関係—逆に言えば思想とそれの及ぼす社会への影響の相関関係であるが—関心が集まっているということが常に意識されなければならない。最後にインテレクチュアル・ヒストリーは**社会経済史**のアプローチと似ている要素を有しているが、同じものであると考えられるべきではない。社会経済史的な思想史の方法が主にヨーロッパの歴史学・社会科学の影響を受けて勃興したのにたいし、インテレクチュアル・ヒストリーはアメリカの文化的土壌を背景にして発展してきたという歴史的な相違があるからである。次章においてはインテレクチュアル・ヒストリー勃興のアメリカ的背景に触れてみたい。

(7) *The Social Ideas of American Educators*(1935, Rev. ed., 1959.) Preface, XIV, XVI.

(6) Curti, Merle, "Intellectuals and Other Peoples", *American Historical Review*, IX (January 1955). 邦訳: 有賀貞訳『社会と知識人』(『アメリカーナ』第1巻第1号1955) カーティは同論文において、知識人という言葉が最初に用いられたのは20世紀初期であり、はじめ社会主義者や頭脳労働に従事するもの一般をさして使われ、その後作家や評論家たちをも指してこの言葉が使われるようになったといっている。

第二章 インテレクチュアル・ヒストリー —その起源と発展

インテレクチュアル・ヒストリーは19世紀後半から20世紀初期にかけてアメリカで起こったことはすでに述べた。この新しい歴史解釈が、いわば当時オーソドックスと考えられていた史学研究にたいする反動であることにも触れたが、これは具体的にはドイツ歴史学の影響を強く受けていた、ハーバート・バクスター・アダムス等を中心とする「科学学派」への挑戦をも意味した。すなわち1910年頃にジェイムス・ハーヴェイ・ロビンソン等を中心とする「新歴史学派」が現われて、新しい歴史理論を展開したのであり⁹⁾、それ以前にはモーゼス・コイト・タイラーやエドワード・エグルストン等の努力により、1900年前後にかけてアメリカ国民の自国の文化的遺産にたいする関心が高められていたのであった⁹⁾。

アメリカ社会の知的活動にたいする関心は建設初期のニュー・イングランドにおいてすでに見られ、また南部のヴァージニア植民地についても同じことがいえる。エドワード・ジョンソン、コトン・マザー、ヒュー・ジョーンズ等が代表的な著作を残している¹⁰⁾。16世紀初期にはサミュエル・ミラーが「18世紀の回顧」を表わした¹¹⁾。

これらの思想家の著述をしてインテレクチュアル・ヒストリーの起源とすることはできない。その理由の一つは、ジョンソン等は確かにアメリカにおける知的活動の状態を克明にするにはいるが、その目的や問題意識において、現在われわれが考えるインテレクチュアル・ヒストリーの目的・対象とは非常に大きな相違があることである。一口に言えばこれら初期の思想家にとっては、思想が歴史の発展に及ぼすであろう影

響について考慮するのは重要なことではなかったのである。第二の理由としては、知的生活全般に関する関心はアメリカ史研究者の間で連続したものではなく、19世紀を通じて知的活動にたいする意識が断続してしまったことがあげられよう。アメリカ史研究の主流は政治史、法制史にあったこと、「科学学派」が客観的記述を重んずるあまり、歴史敘述に個人の主観や価値判断のまぎれてむ余地を与えようとはしなかったことなどが19世紀の特徴としてあげられよう。思想の歴史を扱う時に歴史家自身の価値基準が解釈に大きな影響を与えるのを考えるとき、こういった学問的雰囲気では知的生活の記録が、いわば従属的状态に置かれたのはむしろ当然なものとするべきであろう。

アメリカ史研究がこういった傾向から脱皮し、新しい方法論をむかえるようになったのはさきに述べたタイラーとエグルストンの著作があらわれてからであった。タイラーは「文学史より見たアメリカ革命」において、エグルストンは「十七世紀におけるイギリスからアメリカへの文明渡来」において共に、アメリカ国民をして自国の知的発展にたいする認識を喚起した。その他に二人に共通することは、彼等自身が共鳴できる思想をして社会進歩にたいする大きな貢献をなしたと考えていることである。すなわちタイラーは民主主義思想の、エグルストンは科学思想の社会進歩における役割を強く打出している。かれらにとっては、民主主義思想と科学思想は独立して存続しうるものであり、社会を動かす力を有しているように思われこの二人の研究の中に、思想の自律性 (autonomy) と機能 (function) に関する認識がすでに顕著であるが、これはのちのインテレクチュアル・ヒストリー的アプローチの中心課題となるものであった。

タイラーやエグルストンはインテレクチュアル・ヒストリーのパイオニアであるが、かれらによって呼び起された知的生活の歴史への関心興味が一つの学問体系にまで発展するにはなおいくつかのステップを経ねばならなかった。その中でとくに重要なのはまず第一に、先にも触れた、ロビンソン等の「新歴史学派」の抬頭及びその及ぼした歴史解釈への影響があげられよう。第二のステップは1920年代のいわゆるアメリカの「文化的開花」であり¹²⁾、第三のステップはアーサー・O・ラヴジョイを編集主幹とした *Journal of the*

(8) James Harvey Robinson (1863-1936)

(9) Tyler, Moses Coit, *The Literary of the American Revolution*, 1897; Eggleston, Edward, *The Transit of Civilization from England to America in the Seventeenth Century*, 1900.

(10) Johnson, Edward, *Wonder-working Providence of Zion's Saviour in New England*, 1654; Mather, Cotton, *Mag nalia Christi Americana*, 1702; Jones, Hugh, *The Present State of Virginia*, 1724.

(11) Miller, Samuel, *Brief Retrospect of the Eighteenth Century*, 1803.

(12) John Higham, "The Rise of American Intellectual History" (1951), *op. cit.*, p. 464.

History of Ideas が1940年に創刊されたことであろう。これらのステップについて順に触れてみたい¹³⁾。

ロビンソンは1895から1919年までコロムビア大学で歴史学の講義を担当した。かれの歴史理論は「新しい史学」(the New History)といわれる。1912年には同名の、かれの評論を集めた書物が出版されている。この頃かれは「ヨーロッパにおける知識階級の歴史」のセミナーをもち、「過去の(大学講義で)無視されていたヨーロッパの知的発展を認識するよう学生を指導する」よう意図し¹⁴⁾、思想と出来事との関係をとらえようとしていた。例えば宗教改革史を調べる場合、改革以前の教会の状態や中世のキリスト教思想にまでさかのぼって教会内外の変革をとらえようというのであり、フランス革命を扱う場合にはこの大きな社会変動をもたらした18世紀の社会状況をまず明きらかにしようというのである。特定の出来事を事件の発展に応じて忠実に追究するのみならず、その出来事をそれを生んだ時代的背景との連関においてとらえようというのである¹⁵⁾。

以上のような相対主義的歴史観が「新しい史学」の一つの特徴であるが、もう一つ重要な要素はそれが思想の機能性を強調していることである。この場合の思想とは歴史的知識というべきものであって、ロビンソンにとっては人間精神の発展史からえられた知識を現実の諸問題にあてはめ、将来のよりよき社会を建設するためのインストラメントとすることがとりも直さず歴史学の望ましい姿勢なのであった。ロビンソンがとくに意義ありと考えたのは、過去においても進歩の思想や社会改良の思想が存在したことであり、これらからえた知識をもとにして、より民主的なアメリカ社会を建設することをかれは意図していたようであった。かれが革新主義的な政治思想を有していたことも納得のいくことである。

以上のようにロビンソンは学問的にはプラグマティ

ストであり、相対主義の立場をとり、政治的にはプログレッシヴであった。かれの歴史理論はかれの指導を直接的にあるいは間接的に受けたヒストリアンによって受けつがれていった。ロビンソンはアメリカ国民の知的発展史に最初に注意をはらったものではないが、このことは思想の機能—とくにリベラルな思想—についての認識を広く伝播する役割を果たしたかれの貢献を減ずるものではない。

ロビンソン等「新歴史学派」の努力によりアメリカ独自の歴史解釈が形成されつつあったのであるが、この傾向がさらに推進されたのは1920年代になってからであった。この時期にアメリカでは「めざましい活動力と獨創性に富む文学、哲学、音楽および絵画がもたらされ、この文化的開花が過去の文化的資産への関心を方向づけた」のであった¹⁶⁾。国民文化史が歴史学のプロパーな対象にくみいれられつつあったのである。そしてそれを扱うには方法としての機能主義・相対主義が準備されていた。

1920年代にあらわれたインテレクチュアル・ヒストリーの業績としてはカール・ベッカー、チャールズ・A・ピアード、ヴァーノン・L・パリンソンの著作があげられよう¹⁷⁾。とくにピアードとパリンソンは歴史の取り扱う分野を広げ、政治、経済、文学、思想をもインテレクチュアルな活動と解釈している点を記しておきたい。

1930年代には専門領域—例えば民俗学など—においてかなり高度な研究がアメリカの文化遺産についてなされた。ルイ・B・ライトやコンスタンス・M・ローク等はアメリカ植民地における文化活動や、民話などに表現された民衆の思想についてすぐれた業績をあら

(16) Higham, *op. cit.*, p. 464

(17) Becker, Carl, *The Declaration of Independence, 1922: Our Great Experiment in Democracy, 1924: The Heavenly City of the Eighteenth Century Philosophers, 1932; Parrington, Vernon Louis, Main Currents in American Thought 3 vols., 1927-30; Beard, Charles A., An Economic Interpretation of the Constitution of the United States, 1913: The Rise of American Civilization, with Mary Beard, 1927: America in Midpassage, with same, 1939: The American Spirit, with same, 1942.*

(13) Arthur Oncken Lovejoy (1873-1962)

(14) Secretary's 25th Annual Report, Harvard College(Class of 1887). Quoted in *Twentieth Century Authors* (New York, 1942), p. 1186.

(15) ロビンソンの歴史理論の形成に影響を与えたのはウォード (Lester F. Ward) が主唱した新しい社会学の方法やヴェブレン (Thorstein Veblen) の経済学理論であろうとされている。

わした¹⁸⁾。

このように「新歴史学派」の流れをくむインテレクチュアル・ヒストリーが思想と出来事の相関関係に重点を置く一方、他方では思想の幅広い解釈を追究したのである。この際インテレクチュアル・ヒストリーといわゆる社会史とを区別する必要があるが、二つはあまりにも接近している。宗教、教育などの知的活動の歴史を社会環境との関連においてとらえようとする場合このような現象が生ずるのは予測されよう。これは逆に見れば社会史の範囲の拡大とも解釈されようが、この問題については別の機会に考えてみたい。

「新歴史学派」のアプローチが思想の「外部」をみるものであり、社会史的要素が強いのに比較して、ラヴジョイ等のアプローチヒストリー・オヴ・アイディアズは思想の「内奥」を追求するものとして狭義の思想史の要素を有しているといえよう。前者では思想と出来事の相関関係が強調されたのにたいし、後者では思想や観念の内部構造、思想体系の一貫性が問題とされるのである。

1920年頃ジョンズ・ホプキンス大学にヒストリー・オヴ・アイディアズ・クラブが創立されたが、ラヴジョイは創立以来クラブの有力なメンバーであり、1927-92, 1938-39年にはその会長に推されている¹⁹⁾。

ヒストリー・オヴ・アイディアズ・クラブというのはジョンズ・ホプキンス大学の各々異なった学部へ属する教授がインフォーマルに集まって、ヒストリー・オヴ・アイディアズについての意見を交換することを目的としている²⁰⁾。ここでいうヒストリー・オヴ・アイディアズというのは、ある文化圏に、またはある時代に広く浸透した特定の観念を選び出して（ラヴジョイはそれを an unit idea とよんでいる）、その観念の内容あるいはそれと他の観念との結合・混合の過程、さらには社会環境のなかでのその観念の機能の仕方

変遷を追究することである。この特定の観念としては哲学上のもの、倫理上のもの、美学上のものが主なものとされているが、その特定の観念を社会的背景一般において、またそのにない手を中心として考えることを提起していることにおいてヒストリー・オヴ・アイディアズは「新歴史学派」と共通点をもつのである。

ヒストリー・オヴ・アイディアズはその性格上、諸分野の研究者による共同研究を前提とする。この場合でも共同研究は分業的作業の寄せ集めというのではなく、より緊密な協力を要求しているといえよう。そういった意味において単なる哲学あるいは歴史学にのみ限らない広い領域を対象とする *Journal of the History of Ideas* が発刊されたことは大きな意義がある。

その発刊趣旨はつぎの通りである²¹⁾。

- (1) 古典思想が近代思想に及ぼした影響、ならびにヨーロッパ文化がアメリカ文学、美術、哲学、社会運動に及ぼした影響を究明すること。
- (2) 哲学思想の文学、宗教、社会思想への影響を究明すること。
- (3) 科学上の発見と科学思想が及ぼす、文学、宗教社会思想、哲学への影響（これには科学を応用した結果生じる社会上の変化も含まれる）を究明すること。
- (4) 広い影響力をもつ思想や時代風潮についての研究をすること。例えば進化論、進歩の思想、原始主義、行動の動機の類型、人間性にたいする相反した理論、自然や社会にたいする機械的・有機的な考え方などが含まれる。

ラヴジョイ等が共同研究から期待していたのは、分野の専門化によってもたらされた弊害が取り除かれれば、諸領域の知識の相互交流が頻繁になるであろうということであった。他人の領域にむやみに侵入することなく、協力的な意味においての知識の公開、異なった分野との協力体制を一つの可能性として提起しているのである。*Journal of the History of Ideas* が各領域をつなぐリエゾンになることがラヴジョイ等の希望だったのである²²⁾。

(18) Wright, Louis B., *Middle Class Culture in Elizabethan England*, 1935: *Culture on the Moving Frontier*, 1955: *Cultural Life of the American Colonies*, 1957: Rourke, Constance M., *Troupers of the Gold Coast*, 1928: *American Humor*, 1931: *Davy Crockett*, 1934.

(19) Stimson, Dorothy, "The History of Ideas Club", *Studies in Intellectual History*, op. cit., pp. 174-196.

(20) *Ibid.*, p. 178.

(21) Arthur O. Lovejoy, "Reflections on the History of Ideas", *Journal of the History of Ideas*, I (January 1940), p. 3.

(22) *Ibid.*, pp. 4-5.

総合的研究方法がヒストリー・オブ・アイディアズ学派によってすすめられ、積極的に史学研究に用いられるようになった。この方法はいまだに完成されたものではないが、かかる接近方法の完成—インターディシプリナリー・アプローチとふつういわれているが—インテレクチュアル・ヒストリーがになっている課題の一つであるといえるのではないだろうか。

このようなヒストリー・オブ・アイディアズの接近方法を用いてアメリカの知的生活の歴史を究明しようとした歴史家として、サミュエル・エリオット・モリソン、ペリー・ミラー、モートン・ホワイト、ラルフ・B・ペリーやラルフ・ゲイブリエル等がおり²³⁾、文学から転じてアメリカ史研究にすぐれた業績を示しているものにハワード・マムフォード・ジョーンズ、ヘンリー・ナッシュ・スミス等もこのグループに属そう²⁴⁾。前述したライトもロークも文学から史学へ転出したひとたちである。これらのインテレクチュアル・ヒストリアンは思想や観念体系の内部に立ち入って観察し、それらを自律のものとする傾向がある。従がってかれらにとっては思想をソーシャル・コンテクストにおいてとらえようという試みは第二義的な意味のみしか有さないのである。

要約すれば、インテレクチュアル・ヒストリーはその対象としての思想の解釈、そして思想と社会的背景の連関の見方によって、二つの種類に類別されよう。

²³⁾ Morison, Samuel Eliot, *The Builders of Bay Colony*, 1930: *The Puritan Pronaos*, 1936, 2nd ed. published under title: *The Intellectual Life of Colonial England*, 1956; Miller, Perry, *Orthodoxy in Massachusetts*, 1933: *The New England Mind: the Seventeenth Century*, 1939: *The New England Mind: From Colony to Province*, 1953: *Errand into the Wilderness*, 1956: Perry, Ralph Barton, *Puritanism and Democracy*, 1944; Gabriel, Ralph, *The Course of America Democratic Thought*, 1940; White, Morton, *The Origins of Dewey's Instrumentalism*, 1943: *Social Thought in America: The Revolt against Formalism*, 1957: *The Intellectual versus the City*, with Lucia White, 1962.

²⁴⁾ Jones, Howard M., *Idea in America*, 1944; Smith, Henry Nash, *Virgin Land: The American West as Symbol and Myth*, 1950.

すなわち (a) ニュー・ヒストリーの流れをくむものと、(b) ヒストリー・オブ・アイディアズの流れをくむものである。いずれの伝統を受け継いでいたとしても、インテレクチュアル・ヒストリーにおける業績の多くはアメリカ文化に固有の題材を選び、アメリカ独自の接近方法と解釈を発見し開拓してきたのである。

最近のインテレクチュアル・ヒストリー研究としてはヘンリー・スティール・コマジャー、ハーヴェイ・ウィッシュ、ジョン・ハイアム、カール・ブライデンバウ、ストウ・パーソンズ等の著作が注目されなければならぬ²⁵⁾。ミラー、カーティ、ライト等もこの分野においてたゆまない努力を続けていることをも付記しておきたい。

なかでもコマジャーとパーソンズの研究は、二つのインテレクチュアル・ヒストリーの流れがあゆみよりつつある傾向をよく示しているように思われる。

一般的にいてコマジャーはロビンソン、ピアード、バリントンなどのプラグマティックな思想とプログレッシブな態度の影響を受けているといえよう。かれは1950年に「アメリカ精神」(*The American Mind: An Interpretation of American Thought and Character Since the 1880's*)をあらわした。この書物は南北戦争後から20世紀中頃にかけてのアメリカの思想を取り扱っている。コマジャーが強調しているのは、この期間中アメリカ社会には一つの連続した思想があり、それは進歩的な民主的な思想であったということである。さらにかれはこういったリベラルな思潮がアメリカ社会の知的生活の性格を方向づけてきたと解釈している。具体的には進化論、プラグマティズム、新しい学問である社会学と「新経済学」がアメリカの文学、宗教、政治などに大きな影響を及ぼしてきたと考えているのである。民主的な思想（これはコマジャーの共鳴しうる思想であるが）が実践的に社会改良の要因となってきたことを示す一方、そのより高い次元でのインテレクチュアル活動への貢献をも追究してい

²⁵⁾ Wish, Harvey, *Society and Thought in Early America*, 1950: *Society and Thought in Modern America*, 2nd ed., 1962; Higham, John, *Strangers in the Land*, 1955; Bridenbaugh, Carl, *Cities in the Wilderness*, 1938: *Myths and Realities*, 1952: *Cities in Revolt*, 1955. Henry Steele Commager と Stow Persons の業績については後述してある。

るのである。

一方パーソンズは1958年に「アメリカ精神」(*American Minds: A History of Ideas*)をあらわした。この研究においてかれは植民地時代から現代までのアメリカにあらわれた主要な思想(あるいは時代風潮)を五つ選び、それらの内容を明きらかにしようとしている。五つの思想とは(a)植民地時代初期のキリスト教神学、(b)18世紀の啓蒙思想、(c)19世紀前半の民主主義思想、(d)19世紀後半の自然主義思想、(e)現代の新民主主義思想である。パーソンズはこういった思想の機能あるいはそれらと社会状況との関係についてあえて言及しないというのではないが、思想内容の分析の方がいくらか強調されている。と同時にかれは植民地社会の宗教性を強調するあまり、同時に起りつつあった世俗化への動きを軽視しているようでもあり、一般市民のもつ思想や観念を脱落させる傾向がある。しかしパーソンズが、思想に及ぼす社会環境の影響といったものを意識しているのは明らかである。

以上のべたように、コマジャーとパーソンズの選んだインテレクチュアル・ヒストリーの対象には相違がみられるのであるが、われわれはむしろ二人の問題意識と接近方法にかなりの類似点があることに注目すべきではなからうか。これまでわれわれはインテレクチュアル・ヒストリーをその起源において、ニュー・ヒストリーから発展したものとヒストリー・オブ・アイデアズから発展したものとにわけてきた。また思想の「外部」あるいは「内奥」をみるということで分類してきた。しかし、コマジャーとパーソンズの研究を比較してみると類似点も相違点と同じくらい顕著であることを見るとき、アメリカ史学界におけるインテレクチュアル・ヒストリーの地位と性格が次第に確立されつつあるのを感じないわけにはいかない。

最後にインテレクチュアル・ヒストリー研究について留意しなければならない点が二つある。

まず第一にインテレクチュアル・ヒストリーの研究がともすれば歴史家の主観に左右されやすいことである。パリンソンの例でもみられるように、歴史家が自分が個人的に共鳴できるような思想に自律性を与え、それに社会の進歩に果す大きな役割を期待することである。逆に言えば、自分が共鳴できないような思想は社会経済的条件が変化すれば衰退するであろうと決めてしまうことである。いずれの思想が一貫して存続し、有効的に社会に働きかけ、いずれの思想が不利な非知性的環境(non-intellectual environment)の制

約をうけるかは慎重に決定されなければならないのはいうまでもない。

第二には、過去50年のインテレクチュアル・ヒストリーの実績は常に考慮されるべきことである。インテレクチュアル・ヒストリーの領域に踏み入るものは一方では思想と社会経済的要因との相関関係を考えるべきであり、もう一方では思想の内容の解明あるいは諸観念相互の関係を考慮すべきであり、この二つの課題を均衡に扱うべきであろう。具体的には、特定の思想とそれを支持したであろう社会階層との対応関係を不用意に仮定したり、思想と出来事との関係を証拠不十分のままに推論することは危険きわまりないことである。同じく思想の内部構造を追究するあまり、それをもたらした社会的基盤やそれのいない手についての考慮を無視することは、思想の全体像を描くことにはならないのではないであろうか。インテレクチュアル・ヒストリーがアメリカ史学界においてリスペクタブルな地位をえるためには、その接近方法を利用する歴史家のたゆまぬ反省が肝要であり、弾力性に富んだしかし確固とした、インテレクチュアル・ヒストリアンのおのの考え方がうながされるゆえんである。

第三章 マール・カーティについて

カーティのインテレクチュアル・ヒストリーにおける業績のいくつかについてはすでに触れてきたが、インテレクチュアル・ヒストリーの発展に大きな貢献をなしてきたカーティについてしるすのがこの章の目的である⁽²⁶⁾。

ミンシッピー・ヴァレー歴史学会は1952年に「ごく常識的な意味でのすぐれたアメリカ史研究」に関するアンケートを行なった。「すぐれた」という意味は、オリジナル且つ将来において重要な参考文献として使われるであろうということである。1920—35年度に発表された、伝記を除く研究において第一位を占めたのはパリンソンの *Main Currents in American Thought* (3 vols. 1927—30) であり、同じく1936—50年度についてはカーティの *The Growth of American Thought* (1943) が第一位に選ばれた。奇しくもこれら二つの著作はインテレクチュアル・ヒストリーの発展に重要な貢献をしてきたものである。このアンケートの結果はインテレクチュアル・ヒストリーがアメリ

(26) カーティについては井出義光氏が『米書だより』(第79巻 1959.10)において紹介している。

カ史学界の一つの主流になりつつあることを示しているものであり、その意味においてたいへん興味深いものである⁽²⁷⁾。

マール・カーティは1897年9月にネブラスカ州パピロン（オマハ市郊外の町で1960年の国勢調査では人口2,235）で生まれた。ハーバード大学に学び1927年にアメリカにおける平和運動の歴史に関する研究でPh. Dを与えられた。スミス・カレッジやコロムビア大学などで教鞭を取ったのち、1942年にウィスコンシン大学にうつりそれ以来同大学歴史学教授である。ミシシッピ・ヴァレー歴史学会会長（1951—2）、アメリカ歴史学会会長（1953—4）をつとめたことがある。イギリス、インド、メキシコ、ニュー・ジールランド、オーストラリアの大学で客員教授として招聘されたことがある。1959—60年にかけては東京大学で教えたことがある。

この小論の目的はカーティの著作について一つずつ書評をしていくということではなく、それらをインテレクチュアル・ヒストリーの性格—ニュー・ヒストリー型にしろヒストリー・オヴ・アイディアズ型にしろ—to 照らしてみながら再検討してみようというのである。

カーティの著作を一覧すれば、第一に、かれの歴史

家としての関心がいかに広いものであるかわかる。インテレクチュアル・ヒストリーが幅の広い歴史解釈を目指しているのを思い起す時、このカーティの関心の広さはよく理解できるものである。第二には、カーティが歴史的相対主義の立場をとり、思想と出来事の相関関係、思想の機能について研究に重点を置いていることがわかる。思想をソーシャル・コンテクストにおいてとらえようというのである。第三には、思想の社会性を論ずる反面、自然科学思想、建築にあらわれた時代風潮といった、以前には比較的軽視されていた概念なども自分の研究の中心課題にしているのに気付く。いわばヒストリー・オヴ・アイディアズの問題意識がカーティの著作にうかがわれるのである。第四に、カーティの選ぶテーマは、かれ自身が生きている時代に重大な位置を占める問題となんらかの関係があることである。アメリカ社会が直面している国内・国際情勢がカーティの問題意識に影響を与えているのではないかという仮定がなりたつのはこのためである。もしそうであるならば、カーティの歴史研究の経過をみることによって、一連の出来事が特定の思想家—この場合はカーティの考え方になんらかの影響を与えたのではないかという想定も可能であろう。

カーティの著作を時代的に四つに大別し、グループごとに検討してみたい。この際著作とは広義に解釈さ

(27) ちなみに第2位以下の著作は次のようなものである。

1920—35年度

The Frontier in American History, by Frederick J. Turner, 1920.

The Great Plains, by Walter P. Webb, 1931.

The Rise of American Civilization, by Charles A. and Mary R. Beard, 4 vols., 1927—1938.

The Colonial Period of American History, by Charles M. Andrews, 4 vols., 1934—1938.

The Declaration of Independence, by Carl Becker, 1922.

Life and Labor in the Old South, by Ulrich B. Phillips, 1929.

A History of the United States, by Edward Channing, 6 vols., 1905—1925.

The Maritime History of Massachusetts, by Samuel E. Morison, 1921.

New Viewpoints in American History, by Arthur M. Schlesinger, 1922.

1936—1950年度

The British Empire before the American Revolution, by Lawrence H. Gipson, 7 vols., 1936—1949.

Ordeal of the Union, by Allan Nevins, 2 vols., 1947.

The Civil War and Reconstruction, by James G. Randall, 1937.

The Atlantic Migration, by Marcus L. Hansen, 1940.

The Age of Jackson, Arthur M. Schlesinger, Jr., 1945.

The Economic Mind in American Civilization, by Joseph Dorfman, 3 vols., 1946—1949.

The New England Mind, by Perry Miller, 1939.

The Flowering of New England, by Van Wyck Brooks, 1936.

The American Mind, by Henry S. Commager, 1950.

れるべきであり、専門研究、学術雑誌論文のほかに、概説書、公開講演、書評も含まれている。

まず第一のグループは1920年代から30年代にかけて書かれたものである。次の著作があげられようがアメリカの平和運動に関するものが多い。

American Peace Crusade, 1929.

Bryan and World Peace, 1931.

Peace or War: The American Struggle, 1636-1936, 1936.

(Ed.) *The Learned Blacksmith: the Letters and Journals of Elihu Burritt*, 1937.

ハーバード大学在学中のカーティが第一次世界大戦の成り行き—とくにアメリカの参戦—に大いに関心を抱いたことは容易に想像できることである。Ph. D. 論文（これは *American Peace Crusade* としてカーティの最初の出版書物となった）を含めてかれの初期の著作が平和の問題に関するものであるのはこの意味においても興味深い。

あきらかにカーティは平和主義・平和運動の趣旨には原則として共鳴しているが、アメリカにおけるこの種の運動の歴史についてはかれはむしろネガティブな評価をしている。すなわち平和運動の弱点として、

(a) 運動内部における分裂および各派の対立、その結果生ずる無駄な衝突、(b) 戦争のもつ魅力にたいして平和主義者が無理解であったこと、(c) 政治的経済的利害関係の複雑さの前には平和主義の理想があまりにも幼稚な理論に基づいていたことなどを挙げている。現実にたいする認識が、平和主義を含めた理想主義一般に欠けているのはどうしても避けられないことなのであろうか。カーティはこの問題についてははっきりとした解答は与えていない。しかし平和主義にたいして根本的には共鳴してはいるが実際にはベンジミン・フランクリン的な考え方をしているようである。このような考え方は、アメリカを第一次世界大戦に引き込んでしまったウィルソン大統領の理想主義の弱さにたいしての一知識人の幻滅感とプロテストを表わしていると推測できはしないであらうか。

バリット書簡集は、19世紀中葉、平和の理想のために献身したエリフ・バリットの手紙や日記をカーティが編さんしたものである。オーソドックスな、法制史

や軍事史を中心にした狭義の歴史学ではタッチできないような資料が発見され公けにされているのであるが、ここにも古い史学研究のからを破ろうとするカーティの意欲がうかがえる。

第二のグループとしては次の著作があげられよう。

The Growth of American Thought, 1943. Third ed., 1964.

Roots of American Loyalty, 1946.

"The Democratic Theme in American Historical Literature," Presidential Address, Mississippi Valley Historical Association, April 1952.

これらの著作をカーティが書いたのは、時代的には1930年代から50年代のはじめにかけてである。世界各地に抬頭した全体主義の挑戦にたいして、民主主義の理想の上に築かれたアメリカ文明が思想の上でも政治体制においても安定した、高い水準に到達したことを示す意図をもって書かれたとみてよいのではなかろうか。

アメリカにおける愛国主義の研究は、アメリカ国民の自国への忠誠の観念がいかに成長してきたかを客観的に純粋に学問の立場から検討しようというのである。カーティは独立記念祝典のときの演説とか、大学の卒業式の祝辞、教会での説教などの史料を通じて、ともすれば党派的、感情的になりやすい問題を取り扱っているのである。かれの結論は、アメリカ国民の忠誠心は時には扇動され極端な行動に走ることもあったが、一般には理性的な判断に基づいていて、そしてふだんは利害関係のために対立している個人も、国家の存続という「より大きな善」のためには一致して行動をするというのである。カーティはアメリカ社会の根源的思想を国家にたいする忠誠心という観点からみているのである。

ミシシッピ・ヴァレー歴史学会会長就任講演は、アメリカ民主主義発展を取り扱った数多くの著作の史学史的検討が主なテーマである。古くはジェイムス・F・ローズ、ウッドロー・ウィルソン、エドワード・チャニングの研究に触れ、更にくだってはアンドルー・C・マクローリン、フレデリック・L・バックソン、カーティス・ネットルズ、ゲイブリエル、ベッカー、ミラー、ペリー等による、アメリカ民主主義の考

察をまとめている⁽²⁸⁾。かれはこれらの歴史家が、常にヨーロッパ社会との比較においてアメリカ社会の性格を見極めようとし、かれらの生きた時代の風潮を反映して民主主義の問題を扱っていることをも指適するのである。

The Growth of American Thought (邦訳「アメリカ社会文化史」)についてはいまさらそのアメリカ・インテレクチュアル・ヒストリーへの貢献を述べる必要はない。先に述べられた以外のこの著作の特徴としてはまず第一に、アメリカニズムともいべきアメリカ独特の文化はもともと外から移入されたものであったが、それがアメリカの自然的・社会的環境と接触することによっていかにアメリカの文化的土壌に適した型へと変遷していったかを強調している点であろう。例えばヨーロッパから移入された思想や文化伝達のための制度機関は、アメリカの状況の要求に適応しながら、アメリカ社会に受け入れられたというのです。

第二に、各時代における主要な風潮をとりだし、それらが同時代の政治、文学、哲学的思考活動などに及ぼす影響に注目していることである。植民地時代を通じてはキリスト教と啓蒙思想が、独立戦争から建国初期にかけてはナショナリズムが、19世紀には最初民主主義の理念が強く、後になると新しい型のナショナリズムが商業第一思想、科学思想と相伴って抬頭してきた。20世紀には楽天主義と幻滅の気持が交互にあらわれるが、カーティはこのように激変する社会の中で知的活動の性格をとらえようとしている。

第三には、カーティはアメリカ史を通じて継続した一つの思想が存在してきたと考えている。その思想とは進歩の観念であり、社会改良を目的とした思想であったとしている。こういった進歩の観念にたいするカ

ーティの考え方は、そのまま「民主主義的偏見」ともいべきかれの歴史観を示すものではないだろうか。

その他一般市民のもつ、特定の出来事や人物・外国にたいするイメージをも含めた広い意味での思想を研究の対象としたことなどを考えると、この著作はインテレクチュアル・ヒストリーにおける画期的な業績といわなければならない。

第二次世界大戦での経験はカーティにまた新たな研究課題・問題意識を提出した。アメリカ社会はこの再度にわたる大戦の結果大きな変革をとげたのであったが、かれはこの変革の実体をとらえようとして次の著作を書いた。

The Social Ideas of American Educators, 1935.
(Pageant Books edition, with a special chapter for past 25 years, 1959.)

The University of Wisconsin; A History, 1848-1935, with Vernon Carstensen, 1949.
"Human Nature in American Thought: The Retreat from Reason in the Age of Science" (1953)

"Intellectuals and Other Peoples," Presidential Address, American Historical Association, December 1954.

The American Paradox: the Conflict of Thought and Action, 1956.

大戦での勝利は、皮肉なことにはアメリカ国内において、民主主義の理想とは相反するよな傾向を抬頭させたのであった。インターナショナリズムにたいしての反抗や「知識人にたいする民衆の不信」(anti-intellectualism)とよばれる傾向がそれである。とくにアンタイ・インテレクチュアリズムはカーティにはアメリカの革新的・民主的伝統を脅かしているように映った。アメリカ国民が国家危急の際に知識層や専門家に依存してきた反面、理論や専門知識を本能的に疑い、嫌ってきた事実を歴史的に究明しようというのが、このグループの著作に共通したカーティの問題意識である⁽²⁹⁾。

カーティは教育の問題について少なからぬ関心を示しているが、これは一方ではかれがいかにかに、社会改革

⁽²⁸⁾ Rhodes, James Foster, *History of the United States from the Compromise of 1850 to the End of the Roosevelt Administration*, 9 vols, 1899-1928; Wilson, Woodrow, *A History of the American People*, 5 vols., 1902; Channing, Edward, *A History of the United States*, 6 vols., 1905-1927; McLaughlin, Andrew C., *Steps in the Development of American Democracy*, 1920; Paxson, Frederic L., *American Democracy and the World War*, 1936; Nettels, Curtis, *The Roots of American Civilization*, 1938.

⁽²⁹⁾ 主反知主義は「理性からの後退」としてみることができよう。その場合その用語はいくつかの異なる哲学的な意味をもつのである。「まず過度の抽象論・観念調への代行として、経験と常識と行動とを主

における教育の役割を重要視しているかを証明するものであろう。かれはアメリカの学校教育に批判的であるが、それは民主主義思想を伝播し、民主的市民教育の実践的訓練の場としての学校にたいするかれの期待が大なることをも示すものである。とくに学問の自由、思想の自由が反動主義の脅威にさらされている現状において、教育に従事するものの真剣な自己反省がうながされるゆえんである。この意味においてとくに注目されなければならないのは、カーステンセンとの共著になる「ウイスクンシン大学史」である。この著作において著者は、思想の統制や学問への諸々の妨害に直面したとき、あるいは州の機関として同大学が州民を社会教育する場とする要請が高まったとき、歴代の学長がいかにこれらの難問題を処してきたかを明きらかにしようとしている。

さて第二次世界大戦での勝利の結果、アメリカは世界最強の国となりそれと共に国際政治の舞台においてはかつてなかった試練を受けることとなった。アメリカは確固たる外交政策をうちたてることを強いられたのである。孤立主義の是非、国際連合へのインヴォルブメントの是非について議論が繰返された。アメリカが果す国際関係における役割を再検討しようというのが第四のグループに属する著作の共通テーマである。

Missions Overseas, 1838-1938, with Kendall Birr, 1954.

American Philanthropy Abroad, 1963.

”The Reputation of America Overseas, 1776-1860” (1949)

”The Immigrant and the American Image in Europe, 1860-1914” (with Kendall Birr, 1950)

”America at the World Fairs, 1851-1893” (1950)

Prelude to Point Four: An American Technical

張する(見方)であるが、これは左翼的思想家によって支持されている。第二には、真理探究の力として、人間の本能や信仰といったものを理性より重視する思想を表わす。ウィリアム・ジェームス、ラインホルド・ニーバー、ヘンリー・ミラー等の考え方がこれに属する。第三に、反主知主義は観察、実験、論理的推理によって合理的要素と非合理的要素の思考における役割を究明しようとする態度に用いられる・フロイド、マルクス、ジョン、デュレイ等の努力がこの定義において反主知的と言えるが、かれらの研究を誤まって理解し応用しようとしたもの

このリストが示すようにカーティは国際関係の中でも、政治、経済、軍事の面のみならず、思想・技術の交流を含むいわゆる第四次元(文化)での交流の重要性を強調している。この種の交流においては、それに参加する各国相互の理解と信頼が前提条件であるのはいうまでもない。そして、文化交流とはいかなる「交換物」を含むものであるかを明確に把握することが必要である。カーティはとくに、ある国民が他国にたいしていただくイメージや、高度の思想の国際伝播以外のより低いレベルでの市民接触に焦点を合わせているようである。

バーとの共著になるヨーロッパにおけるアメリカのイメージ研究でカーティは、移民は文化交流のもっとも初期的なメッセンジャーであると考え、19世紀にアメリカにわたったヨーロッパからの移民が、到着以前にアメリカをどう見ていたか、到着してからアメリカの現実はどう反応しているかを明きらかにしようとしている。アメリカは the land of promise であるというイメージが19世紀のヨーロッパには強かったし、移住してのちこの想像が真実のものであったと感じた移民が多かった、というのがカーティの結論である。なおこの研究には、移民が母国の家族や親類友人に書き送った手紙、関係政府や移民促進協会の発行した宣伝パンフレットなどが資料として使われている。

同じくバーとの共著になる *Prelude to Point Four* そして *American Philanthropy Abroad* は、文化交流におけるアメリカ側の態度を取り扱ったものである。それもアメリカ人が政府の代表としてよりも、個人的な動機で、民間人の資格で(広い意味の)文化交流にかかわってきた経過をたどろうというのである。国外で各種の慈善事業や宣教の仕事に専念したり。単身外国政府に技術顧問として雇われようとアメリカ人が決心するにはいろいろの動機が考えられるが、中でも使命感に基づいたものが多いという結論をカーティは導き出している。

カーティの業績のうちいままでのリストにあげられていないもので重要なものが二つある。一つは *Probing Our Past, 1955* であり、他の一つは *The Making of an American Community, 1959* である。これらの著

のために、かれらの真価が十分に認識されないのはかくれもない事実である」前掲有賀訳 27 頁。なお “Human Nature…” の論文にも同様な定義が示されている。

作は四グループの研究の内容や問題意識をまとめ、その接近方法をよくしめしているように思われる⁽³⁰⁾。

Probing Our Past はカーティの専門研究論文を11集めたものであり、かれの幅の広い歴史解釈をうかがうことができる興味ある書物である。論文は (a) 史学史、(b) 思想の伝播と内容、(c) アメリカの海外進展の三項目にわけられ集録されているが、そのいくつかはすでにこの小論で紹介されている⁽³¹⁾。

「アメリカ社会の形成」と題する後者の研究においてカーティは、ウィスコンシン州トレンペロー郡 (Trempealeau County) の形成史を社会科学の方法を導入しながらも、歴史的に究明しようとしている。すなわち社会科学の客観的定量的分析法と、従来の歴史学の方法—記述の方法—を併用して、真に客観性のある叙述がえられるかどうかを実験的に試みているのである。さらにこの研究においては、アメリカ史学界の中心課題の一つであるいわゆるターナーのフロンティア学説の真憑性が再検討されている。

カーティとかれの共同研究者がみたかぎりにおいて、トレンペロー郡に関してはターナー学説の正しさが客観的に証明されたのである。肥沃な土地が自由に開墾者に保障される時、まず経済活動における平等の原則がはたらき、つづいて政治参加への機会が住民に等しく保障されるというのである。しかし著者達は、ターナー学説には一つの大きな修正が加えられなけれ

ばならないと明記している。フロンティアが民主的な思想や制度を生み出すのではなく、それらは他の既成の社会において発明されフロンティアに移入されたのであり、フロンティアの状件がそれらを実際スムーズに実践化させたというのである。この修正の妥当正はともかくも、定量的に分析された資料をどう解釈するか、トレンペロー郡での「実験」結果はアメリカのほかの共同社会の研究にそのままあてはめることができるかどうか、などの問題が未解決のまま残されているので、この著作については最終的な結論をくだすのは時期尚早のような気がする。

以上カーティの著作を中心にかれのインテレクチュアル・ヒストリーへの貢献をみてきたのであるが、ここで一言触れておきたいのは、かれ個人の「社会思想」についてである。自身の社会思想についてかれは「民主的偏見」とよんでいるのであるが、史学研究においてこういったものは真理探究の面からみて不利ではなかるうか。これについての考慮は別の機会にゆずるとして、ここではカーティの社会思想はかれの育った環境に強く影響されたのではないかと推測する根拠が充分にあることを指摘するととどめる⁽³²⁾。革新主義の風潮がアメリカ社会を支配している時に人格形成

(30) もっとも最近の著作である *Philanthropy in the Shaping of American Higher Education*, with Roderick Nash, 1965 は著者はまだ手にしていない。

(31) I. Historiography

1. "The Democratic Theme in American Historical Literature" (1952)
2. "Frederick Jackson Turner, 1861-1932" (1949)
3. "A Great Teacher's Teacher" — 筆者註：ピアードが De Pau University で指導を受けた歴史学並びに社会学担当の Colonel James Riley Weaver についての小論文である。

II. The Transmission and Content of Ideas

4. "The Great Mr. Locke, America's Philosopher, 1783-1861" (1937)
5. "Francis Lieber and Nationalism" (1941)
6. "Human Nature in American Thought: The Retreat from Reason in the Age of Science" (1953)

7. "Dime Novels and the American Tradition" (1937)

III. America Reaching Outward

8. "The Reputation of America Overseas, 1776-1860" (1949)
9. "Young America" (1926)
10. "America at the World Fair, 1851-1893" (1950)

11. "Prospects for Future Research" (1949) — 著者註：この論文においてカーティは、国際文化交流をインテレクチュアル・ヒストリーの中心課題の一つとして提起している。アメリカ文化の固有性を、他国の文化と比較して明きらかにするのがかれの意図である。

(32) 歴史学者が特定の主観をもつことについてカーティは次のように弁明している。「意識するにしろしないにしろ、歴史家はかれが生きている社会の環境からの影響を通して、ある特定のものの見方を作りあげる。そしてこうして形成されたものの見方はかれの歴史研究に、今度は逆に作用するものである。歴史家が社会を支配する風潮を理解しようとするとき、かれ自身の思想がかれのリサーチに影響を及ぼ

期をすぎし、アメリカ文化開花の1920年代に学問的に成熟したことが、かれの中西部出身、祖先がスイス系であること、そして東部の大学での教育と相伴なって、かれの民主的革新的思想を作りあげたと考えられないだろうか。

インテレクチュアル・ヒストリアンとしてのカーティについての紹介を終えるにあたり、教室でのカーティについて一言ししておきたい。なかでも大学院生指導教授としてのカーティに触れることは意義あることと思う。というのは、セミナーにおいて、また論文指導においてかれの人となりや学風が顕著にあらわれるからである。

カーティはすぐれた教師がすべてそうであるように、学生のペーパーにたいして懇切な批評をおこない、文章のスタイル、史料の扱い方、主要な論点の提示方法について丁寧なアドバイスをこなす。また学生の研究にたいして深く興味をもっているようであるが、これは学生といえども一むしろ学生であるがゆえに一真理探究の仲間であるとするかれの態度と熱意によるものであろう。

カーティ・セミナーでは、アメリカ史の比較的短い時代正分—例えば1880年から1900年といった—を選び、そのうちで観察される諸々の現象を歴史的に解明しようという試みがなされるのである。アメリカ社会の断面を特定の時期でもって、包括的に観察しようというのである。学生はおのおの異なるテーマを選択し、それらの個々の研究成果を一堂にもちよる。こういった方法によって、社会の現象や特定の個人がもつ思想を相互に関連させながら、アメリカ社会の全体像をえがこうというのである。幅広い歴史の分野を求めるインテレクチュアル・ヒストリーの特徴をよくあらわしていると思う。

1963—4年度前期においてカーティ・セミナーは、「19世紀後半から20世紀にかけてのアメリカン・インテレクチュアル・ヒストリー」を主題にし、次のような研究課題を決めた。

“A History of the Socialist Party in the United States,,

“The Political and Social Philosophy of Edward

さないとすることはありえない。こういった傾向は、単なる記述的な著作に取り組む場合よりは、解釈に重点を置く研究においてとくに顕著である」

(*Social Ideas of American Educators, op. cit., xix-xx.*)

Belamy and Its Influence on the Populist Movement,,

“The American Concept of Nature,,

“Alfred Mahan and Theodore Roosevelt,,

“The Theory of History of James Harvey Robinson, Carl Becker and Charles Austin Beard,,

“On Conflicting Interpretations of Federalist Paper No. 10,,

“Social Ideas of a Scientist--the Case of Matthew Fontaine Maury, 1806-1873,,

“David Murray's Work in Japan, 1873-79: An Aspect of Cultural Relations,,

他に教会史に関するものが二つあった。

アメリカにおける社会党に関するペーパーは、社会主義運動に影響を与えた少数の思想家について究明し、選挙における社会党の進出を各地域の問題とからみあわせて分析しようとしている。エドワード・ベラミーの思想がポピュリスト運動に及ぼした影響は大なるものであるとするのが、第二のペーパーの論旨である。第三のペーパーはアメリカ人の自然観についてであるが、アメリカ人が自国の自然環境について考えていることを、ヨーロッパ人がもつアメリカ観と対応させて検討している。一種の比較研究がこのペーパーのねらいである。

T・ルーズヴェルト大統領の海軍拡張論はアルフレッド・マハンの影響によるものであるとするのが第四のペーパーのテーゼである。フェデラリスト・ペーパーNo.10はピアードがアメリカ憲法を経済的に解釈するときの主要な文献であるが、これを批判するものにロバート・E・ブラウンがいる。この両者の見解を再検討しているのがその次のペーパーである。ロビンソン、ベッカー、ピアードの歴史理論を比較しているのが第六のペーパーである。第七のペーパーは「モーリー海軍中佐の社会思想」と訳されようが、一軍人が軍事のこと以外にいかなる思想や関心—政治、社会問題などについて—を有していたかを究明しようとしているのであるが、注目に価するアプローチである。ディヴィッド・マレーは明治の初期に日本政府の招きで来日し、わが国の教育制度の近代化につくした教育者であるが、かれの日本での業績、日本人がもった外国（あるいは外国人）へのイメージを再検討することによって、主に海外技術援助・文化交流に含まれる問題点のいくつかをとりあげているのが最後のペーパーである。

これらの課題研究の総合的評価を前に、カーティがニュージーランドへ旅立ってしまい、セミナーの企画の半分しか達成されなかったのは残念である。